

児童文学の中に見る「影」

田 中 朋 子

はじめに

児童文学は子どものために書かれた文学である。ここには啓蒙にかかわる側面と、想像力による創造という側面がある。前者は児童文学を文学作品として見、後者は何かを伝達するための社会的文化的な媒介物として見るのである。私たちはさまざまな年齢で児童文学とであうことが出来る。幼い頃はおとなから読み聞かせてもらい、字を覚えると自分で読み、おとなになったら子育て中や子どもと接する機会に子どもと一緒によんだり、ひとりでも読むのである。児童文学は、好奇心を誘い、子どもに喜びを与え、あるときにはこの世では体験できない魔法を味わい、妖精や魔女に出会い、不思議な時間の経過が普段味わうことのないファンタジーの世界へいざなってくれる。私たちがその中に身をおくとき、現実から離れて心や魂の開放をさせてくれるものである。

デンマークの児童文学作家ハンス・クリスチャン・アンデルセンは、「おやゆび姫」「はだかの王様」など生き生きとしたリズムや子どもらしい陽気さ、色彩豊かな情景描写の作品で知られている。2005年はアンデルセン生誕200周年をむかえ、デンマーク・コペンハーゲンを中心に“Hands Christian Andersen, 2005”が開かれている。

今回テーマとして影 (shadow) を取り上げたのは、色彩豊かな情景描写の作品で知られるアンデルセンが彼の数多い作品の中でも児童文学とは作風がひととき異彩を放つ作品「影法師」の作品を残していることに注目した。この作品にスポットを当てると同時に、光に比べれば注目度の低い、日常存在を忘れがちな影を取扱った作品を児童文学や文学作品の中から探り、作品の中の影が何を意図しているかを探ってみたいというのが目的である。

I 影について

この世の中には、意識をしながら存在を確かめるものと無意識の中で寄りそうように存在するものがある。確かめると確かめないとにかかわらず光は存在がはっきりし、それは意識の中に存在する。しかしその光の影はどうであろうか。光に照らされた反対側に必ず存在するのであるが、あまり意識はされていない。本物と類似しているが、本物ではないもの。影は常にそのものと共にあり、時には大きく、時には小さくそのものに付き添っている。影に関することばとしては、「影がうすい」「影もかたちもない」「影を潜める」「不況の影がしのびよる」「影を落とす」「影の女」など、建設的なことばではなく、隠れたものやある種不気味さを感じ

させることばとして用いられている。影はきわめて日常的でありながら、なおかつとらえどころのない謎めいた現象で、手でつかめそうで捕まえることができず、身近なようでよそよそしく、自分に似ているようで忌まわしく他人で、ここにいるようですぐに消えてしまうのが影である。

未開文化の風俗習慣や信仰を研究した英国の人類学者・古典学者である J. G. フレイザー (James George Frazer, 1854~1941) は、世界各地の言い伝えを「金枝篇」で著している。その中で、未開人は、自分の影や映像を自分の靈魂、自分自身の生命的部分とみなしている。ネパールを旅行していたサンカラがダライ・ラマと争った時、自分の威力を示すために天高く舞い上がった。しかし、ダライ・ラマはその影を小刀で刺したのでサンカラはたちまち転落し、頸を折ってしまった。また、中国のこととして紹介している話に葬式の時に参列者が自分の影を棺の中に閉じ込められないように、注意するというのがある。これは影を棺の中に閉じ込められると人の健康が危険にさらされると信じているためである。アラビアでは、ハイエナが人の影を踏むとその人は物を言う力を奪い取られると伝えられているという。シュスワブ・インディアンは、喪にある者の影が他の人にかかると、影のかかった人は病気になると思じている。ヴィクトリアのクルナイ族では、新入者は入団式に際して女の影をかけられぬよう用心させられる。女の影がかかると痩せて怠惰になり、愚鈍になるという。ソロモン島では、王者の影に足をかけると死罪になったり、東欧ではクリスマスに影が映らないと死の予兆であると考えられている。古代的、アニミズム的感覚である。日本に伝わっている「影踏み」遊びは古代の宗教的儀式から派生したものと思われる。影が本人から分離すると本人は死んでしまうと言う考えが江戸時代には信じられていた。古代人にとって影は自分の輪郭を動きそっくりに写しだしながら、生きてるように動くからこそ自分の分身にも見えた。影をなくしたり、きずつけられことへの恐怖はたいへんなものであった。多くの国では、影はその人間の体の一部のように考えられるか、「魂」と考えているように思われる。影が人間の靈魂と密接に結びつけられ、その喪失が病気や死をもたらすとまで考えられているところでは、その損耗が持ち主の生命力をそれに応じて損耗させることを予表するもののように憂慮されているとみるのは当然ともいえる。光と影という考え方をすれば、人間の身体と心、意識と無意識、良心と悪心などと深く関連付けことができるのではないだろうか。

II 児童文学作品にみる『影』

1. ジェームズ・バリ J. M. Barrie (1860-1937) 著「ピーターパンとウエンディ」(Peter Pan and Wendy, 1911)

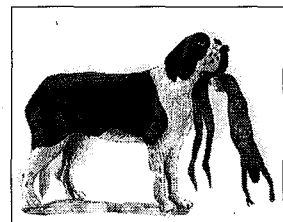
現在「ピーター・パン」として知られる物語は、「小さな白い白鳥 (1902)」という作品が原案となり、バリ (J. M. Barrie) が戯曲として発表したものである。「ピーター・パン～大人にならない子ども」の初演 (1904) 後、舞台上で上演を重ねるうち、アドリブやいろいろなものが補足され、物語も次第に変化していった。1906年にアーサー・ラッカムの挿絵で小説

「ケンジントン公園のピーター・パン」を出版、1911年にF. D. ベドフォードの挿絵で小説「ピーター・パンとウェンディ」を出版、1928年には戯曲「ピーター・パン」が出版された。ここでは「ピーター・パンとウェンディ」(“Peter Pan and Wendy” 1911)を使用する。

子どもの想像から生まれた国、年を取らない国、大人にならない国ネバーランドに住むピーターパンとロンドンの中流家庭ダーリング家のシーンからはじまるピーターパンの物語のChapter 1 “Peter Breaks Through” (ピーター登場)、Chapter 2 “The Shadow” (その影)、Chapter 3 “Come Away, Come Away” (いっちゃった、いっちゃった)を要約して、影についてみてみよう。

1900年の冬、ロンドンの住宅街に少女ウエンディがお父さんのダーリングとお母さんのエリザベス、弟のジョン・マイケルと一緒にくらしていた。ある夜のこと、ウエンディは当たり前のようにお母さんにピーターが時々子ども部屋にやってきて、ベッドの足元に腰掛けて笛を聞かせてくれことを話す。お母さんは、玄関のドアをノックせずに中に入って来れるわけではないじゃないと信じない。しかし、部屋には確かにイギリスに生えている木のものではない葉っぱが残されていた。ウエンディが夢を見ていたわけではなかったことは、まさに次の日、金曜日の夜に明らかになる。お母さんが眠りに落ちて、夢をみていると、一人の見知らぬ男の子がネバーランドから登場する。お母さんは悲鳴を上げて飛び起きる。男の子はかわいい子どもで、すじばかりの葉っぱと木からにじみ出た樹液でできた服を着ていて、歯が一つも生え変わっていないのである。お母さんが驚いて悲鳴をあげるとベルが鳴らされたようにドアが開いてニューファンドランド犬で子どもの世話(ナニー役)をする飼い犬のナナが入ってきた。ナナが低くうなり、男の子に飛びかかると、男の子は身軽に窓から飛び降りてしまう。男の子が死んでしまったと思ったお母さんは通りまで駆け下りるが見つけれない。空を見上げても暗闇の中に流れ星しか見つからない。子供部屋に帰ってきたお母さんはナナが口に何かをくわえているのをみつけた。それは男の子の影で、窓から飛び降りるとき、ピーターパン本人をとらえることができなかったが、窓をピシャリとしめたため、影だけが取り残されたのである。影を窓の外につるしておけば、それを取り戻すために男の子は必ず戻ってくるはずである。

Nana had no doubt of what was the best thing to do with this shadow. She hung it out at the window, meaning “He is sure to come back for it; let us put it where he can get it easily without disturbing the children.”



しかしお母さんはまるで洗濯物みたいで家の格を下げることになると考え、タンスの中に丁寧にしまいこんだ。一週間後の金曜日、ダーリング夫妻はそろってディナーへでかけ、しかもナナはダーリング氏とのけんかの罰をうけて子供部屋から追い出され、庭につながれてしまっている。お母さんとお父さんが家をでかけたあと、ナイトライトが消え、その光よりも何千倍も明るい光が入ってくる。妖精のティンカーベルとピーターパンの登場である。ティンカーベルが影は大きな箱の中にあるとい

い、引き出しのついたダンスの中に入り込み、ピーターの影をみつける。ピーターパンは大喜びでダンスの中身を床にぶちまけ、すぐに自分の影をとりもどし、うれしさのあまりティンカーベルを引き出しに閉じ込めてしまったのである。自分の影は近づければ水滴みたいに自然にくっつくだろうと考えていたピーターはくっつかないことでぞっとし、急いで浴室から石鹸をもってきてくっつけようとするが失敗、ピーターは思い通りにならなくて泣いてしまう。その泣き声で目を覚ましたウエンディは、影をピーターに縫い付けてあげる。

“I shall sew it on for you, my little man,” she said, though he was as tall as herself: and she got out her housewife, and sewed the shadow on to Peter’s foot.

ピーターパンはウエンディのお母さんのお話を聴きに何度かダリング家の窓辺にやってきたと告白する。お話の出来るお母さん役のウエンディを自分の住むネバーランドに連れていきたくなり、弟のジョンとマイケルとを連れてティンカーベルの助けを借りて空を飛んでいくことになる。ピーターパンの冒険ファンタジーがいよいよはじまるのである。



ピーターパンに出てくる影は物語のイントロダクション (Chapter 2, Chapter 3) として登場するが、作者 J. M. バリーはその影については特別な解説をしていない。読者は「影」が本人と離れて、洗濯物のようにそのものの実体が存在できることに驚かされる。しかも犬のナナもお母さんも影を取り戻しにくるのは当然のことと考えている。ここでバリーはピーターパンに影をつけることで、ネバーランドに住んではいるが、妖精や怪物や化け物ではなく、人間であることを暗黙のうちに知らせている。ピーターが影を失うことをたいへん恐れたのは、影が自分から分離してしまい、元に戻らなければ死んでしまうと考えたからではないだろうか。窓をピシャリと閉めることによって、自分からいったん離れた影、どのようにくっつけたらよいかなどと考えるまでもなく、触れれば自分の元に戻ると考えるのは当然のことである。石鹸水ならくっつくと思いを絞ったがくっつかない。いったん離れた影への恐れと不安を抱いたのであったが、ウエンディに糸と針で縫い付けられて離れなくなった影によりピーターは生き返り、力が戻ったことを暗示している。糸と針を使えることは、女性の大切な技術であることも当時の女性のたしなみについて書き、それがいかに役に立つのかを暗示しているといえる。現実の世界に住まず、年を取らない楽しいネバーランドに住むピーターパンも影を失うことは、恐怖だったに違いない。しかし、一方、ピーターパンが生い立ちを語る場面で、自分が生まれた日に、両親が彼が大きくなったら何になるかを話しているのを聞いて、ケンジントン公園にげだし、妖精たちと暮らすようになった。でも、何ヶ月も家を離れて暮らしていたが、飛んで帰って見ると、窓は閉まっていて、お母さんは自分のことをわすれていて、ベッドには別の男の子が眠っていたと語られている場面から、ピーターパン物語を動機づけるには、①成長の

拒否 ②母親からの逃走 ③母親からの追放の3つが揃っているように思われる。ピーター・パンの登場はバリ一人の想像力の産物ではなく、バリが散歩を欠かさなかったケンジントン公園で出会ったディヴィス家の子どものものである。バリは子どもたちに物語を聞かせたり、また子どもたちが想像力にまかせて語る物語にも耳をかたむけた。ウエンディの家庭すなわちダーリング家は、ディヴィス家をモデルにしたといわれている。子どもたちの語りは、意識的と無意識的とに分けると、無意識の発想だといえる。その意味から、ピーター・パンが影を意識的に忘れたとも解釈できる。帰りたくない家ではあるが、帰ったときに締め出されたしまった家への郷愁とも感じられる。「影」を置き忘れることで、再び戻れる家、訪れることの出来る家があることを意味するのではないだろうか。分身としての影である。

2. アーデルベルト・フォン・シャミッソー Adelbert von Chamisso (1781-1838) 著

『ペーター・シュレミールの不思議な物語』(Peter Schlemihls wundersame Geschichte, 1818)

「ペーター・シュレミールの不思議な物語」(国書刊行会)あるいは「影を無くした男」(岩波書店)とも呼ばれる作者、アーデルベルト・フォン・シャミッソーはドイツ文学史の中でロマン主義時代の代表的作家の一人として位置付けられている。代表作である「ペーター・シュレミールの不思議な物語」を執筆したのが1813年で、翌年1814年その原稿を預かっていた友人フケーが、シャミッソー本人の了承を得ないうちに、著者不明のまま世に出してしまったという経緯がある。ロマン主義時代と呼ばれる18世紀末から19世紀初頭にかかるこの時代は、激動に次ぐ激動の時代(フランス革命、ナポレオンの占領、解放戦争など)であり、ドイツの国民同様作家たちの思考、人間性に多大な影響を与えたであろう。その中でもひとときわ時代の運命に翻弄されたのがシャミッソーである。フランスの貴族の子息として生まれたが、1789年のフランス革命によって故郷を追われた彼とその家族は、プロイセンのベルリンに亡命する。両親や家族はフランスに戻るが、ドイツ軍人となり1806年ナポレオン戦争に参加し、祖国との戦いに嫌気がさし、放浪するが帰るところがない。ベルリンに落ち着きこの作品を執筆したのである。この激動と遍歴に満ちた半生がペーター・シュレミールの影に関する物語を描かせるのである。一般に「影」ということばが実体のないアレゴリーとして使われることはあっても、影を中心テーマ、主体、主人公として描かれたものは少ないといえる。話のあらすじをみて、この物語の「影」が何を語るのかを見ていく。

主人公ペーター・シュレミールは、長い難儀な船旅を終えて港に着く。ペーター・シュレミールは、この港町で羽振りを利かせている男 John の弟から富豪トーマス・ヨーン氏への紹介状をもらっていた。これを頼りに男の屋敷を訪れる。彼は貴族の称号をもっていた人物ではないが、きわめて裕福な人物で、見事な大邸宅に住んでいる。トーマス・ヨーン氏はこの港町で何か新しい事業にでも成功した人物か、屋敷は、紅白だんだら模様の大大理石づくりで、円柱がどっさりたちならんでいる。ペーター・シュレミールがトーマス・ヨーンを訪ねると、トーマス・ヨーンは「少なくとも百万は持っていたいもの。さもないと失礼ながら人間の屑同然とい

うものですぞ」という金銭感覚、哲学を披露する。思わずペーター・シュレミールはその哲学に同意してしまう。ペーター・シュレミールはこのような社会での成功を夢見てトーマス・ヨーンを訪れたのである。そこではたまたまにぎやかなパーティが開かれている。このパーティに一人の灰色の男が居合わせた。彼はたくみに振舞い、人々の希望に答えている。ポケットから、指をとげに刺された夫人に絆創膏、パーティの開かれる場所のじめついた場所にトルコ絨毯を、天幕絆や棒、金具、特別上等なテント一式を取り出す。ペーター・シュレミールは、すっかりたまげ、しげしげとその男を見つめないではいられない。あの小さなポケットから、どうしてこのような大きなものを出してることができるのだろう。しかしこの状況で、何といっても驚くべきことは、その場に居合わせた人が別段何も驚きを表していないことであった。男に対して敬意も払わないし、モノの出所を疑問に思ったり、出所を追及したりもしないのである。当初驚いていたペーター・シュレミールも次第にこの渦の中に巻き込まれていく。金の魅力に抗することができなくなり、声をかけてきたこの灰色の男の誘いに乗っていく。不思議な布袋を提供する代わりに、ペーター・シュレミールの影を手に入れようとする。取引は成功する。いとも鮮やかな手つきで私の影を頭のとっぺんから足の先まで、きれいに草の上から持ち上げて、クルクルと巻き取りポケットに収めた。

He put his hand in his pocket drew forth a large strongly stitched bag of stout Cordovan leather, with a couple of strings to match, and presented it to me. I seized it — took out ten gold pieces, then ten more, and this I repeated again and again. Instantly I held out my hand to him. “Done,” said I; “the bargain is made: my shadow for the purse.” “Agreed,” he answered; and immediately kneeling down, I beheld him, with extraordinary dexterity, gently loosen my shadow from the grass, lift it up, fold it together, and at last put it in his pocket.



He then rose, bowed once more to me, and directed his steps towards the rose bushes.

(アンダーラインは筆者)

ペーター・シュレミールは以後思いのままに袋から金を取り出すことができる。しかし、彼は影を失い、そのために胡散臭い人物として、世間の冷たい視線にさらされ、孤独におちいって行く。影を失ったために、ペーター・シュレミールはもうまともに世の中を渡れない。世間の人々は影のない原因を尋ねたり、同情したり、あるいはまた人間としての欠陥と指弾したりする。

I heard some one behind me exclaiming, “Young man! Young man! You have lost

your shadow!" I turned and perceived an old woman calling after me. "Jesu Maria! The poor man has no shadow." All this began to depress me, and I carefully avoided walking in the sun;

ペーター・シュレミールはこの事態を乗り切るために、忠実な召使のベンデルの助けを借りたり、金の力を使って影のないことを隠蔽しようと、画家に影を描かせ急場しのぎをしたりするが、うまくいかない。灰色の男の特徴をしっかりと頭に叩きこませ、忠実なベンデルに灰色の男を捜させ、どんなに多くの金を払ってもよいから影を取り戻すように命じる。しかし、それも無駄な徒労に終わる。しかし、ベンデルは、次の朝、門のところで一人の男から伝言を受ける。「ペーター・シュレミール様、今ここではあなたにお会いすることはできません。航海にですが、来年この日にきっとあなたをお訪ねします。そのときには、ご希望に添えるようなお話ができるはずです。」ベンデルは名前を聞いたが、きっとペーター・シュレミール様は、私のことはご存知です。と立ち去ったというのです。ベンデルは、灰色のコートを着たなどと話すうちにそれは捜していたあの男であることに気づき全く失望するのである。ベンデルは陰になり日向になり、主人を影を無くした男であることがばれないように守り抜く。金持ちにあこがれていたとき訪ねて行ったヨン氏の家で会った美しいファニー嬢に会い、恋をしたが、月夜の夜自分の影が映らないのを見て、卒倒したファニー嬢。彼女から逃れ、ひなびた温泉町で暮らす。ベンデルに何袋分かの金貨を持たせ好みの住居を用意させ居を構える。ベンデルは、主人のことをある外国のえらいお方などと表現したので、町は祝砲がとどろき、美しい娘ミーナがひざまずき、窓の下には群集が万歳を続ける。驚いたペーター・シュレミールは、召使のラスカルに様子を探らせる。プロシア国王が伯爵に親を変えて国内を回っているといううわさを聞く。それに便乗してペーター・シュレミールは、盛大な宴を催し、そこにでてきた林務官の娘ミーナを心から愛してしまう。ペーター・シュレミールは、再来月の一日に結婚の約束をする。何度もデートを重ねるうちうかつにも、影の無い身でありながら月光の下に立ってしまったのである。ミーナはそれを見逃すわけではなく、両親は身に余る光栄に酔いしれていた。ある日ラスカルは自分の仕える主人に影の無いことを知り、出て行く。林務官もペーター・シュレミールの正体を知り、ミーナとの約束も反故になるのである。またしても絶望の底に追いやられたペーター・シュレミールは、あてども無く森や野原をさまよい歩く。そこで誰かに袖を引っ張られたような気がし、あたりを見回すとあの灰色の男が現れていた。「影はお返ししましょう。財布は返していただくなくても結構。ここにサインを」とある文面を差し出す。——ワガ魂ガ自然ニ離脱セシ後ワ本状所有者ニ遺贈ツカマツルコト、異議ナキモノナリ——ペーター・シュレミールは、魂と影を取り換えるなんて、剣呑というものですよと断ると、「魂とやらはいかなるシロモノですか。得たいの知れぬシロモノと現実のものを取り換えておくほうがよほど利口ではありませんかね。影さえあれば恋人はあなたのみもとにありて万々歳ではありませんか」としつこく食い下がる。

"I only beg a trifle as a token of remembrance. Be so good as to sign this memo-

randum." On the parchment, which he held out to me, were these words : —By virtue of this present, to which I have appended my signature, I hereby bequeath my soul to the holder, after its natural separation from my body”

“Hazardous!” he exclaimed, bursting into a loud laugh. “And, pray, may I be allowed to inquire what sort of your soul is?—have you ever seen it? —and what do you mean to do with it after your death? You ought to think yourself fortunate in meeting with a customer who, during your life, in exchange for this infinitely—minute quantity, this galvanic principle, this polarized agency, or whatever other foolish name you may give it, is willing to bestow on you something substantial —in word, your own identical shadow, by virtue of which you will obtain your beloved Minna,—

ペーター・シュレミールにとって無くてはならない影ではあるが、相手のほしがっている署名と引き換えに取り戻す気になれず、きっぱりと別れることを申し出る。灰色の男は、腹いせにペーター・シュレミール本人の影をポケットから取り出し、カビひとつ生やしてはおりませんよと野原に投げつけ足元の陽当たりに広げてみた。自分の影でありながら、灰色の男の意志にしたがっているのを見てなお、悲惨な気持ちになるのであった。心配したベンデルは追いかけてきてこの場の雰囲気を見て取り、去っていく灰色の男の後を追うのである。灰色の男は自分の影のみならず忠実な召使ベンデルをも連れ去ってしまう。途方にくれていると、陽ざしの中を影が一つ走っていくのを見かける。はぐれてしまった主の姿を探している様子であった。ペーター・シュレミールは、踊りかかった。とそのとたん反転し、自分の方に向かって走ってきた。とりあえず押さえて上からもたれこんだが、これは影ではなく、「鳥の巣」と言われるものであった。これを手にすると、影はともかくも姿は消してくれる隠れ蓑を身に付けているものである。この「鳥の巣」に身を隠し、林務官の家に行ってみる。姿が見えないのに、灰色の男が近寄ってきて、この鳥の巣をとりあげ、自分ポケットに納め、ペーター・シュレミールの姿をさらしてしまう。そこでは、かつて召使であったラスカルが自分のお金で買った屋敷やヨン氏の財産を自分のものとし、財産家として、ミーナと結婚しようとしていた。世間の裏街道を歩く男に対して、憎しみを覚え、その場に一緒にいることでさえ、腹立たしさを覚えるのであった。隣の灰色の男は刺すような目つきでにらみながら、前回の羊皮紙とペンを取り、「さあ、署名したまえ」と迫ってきた。署名しようとした瞬間彼は気を失ってしまう。意識がもどって耳にしたのは、地団駄を踏む足音とのろいのことばであった。彼は忠実なベンデルが元の家に戻ったことを知り、もどってみる。ラスカルは召使になるやいなや金庫の合鍵をつくり、金を盗み取っていたというのだ。ベンデルに金貨の詰まったトランクをいくつか分け与え、無理やり自由の身にし、ペーター・シュレミールは、旅立つのである。旅の途中一人の男と道連れになる。時がたち、いつのまにか太陽が昇り、影が地面に伸びるころあいだというのに、隠れるところがなく、隣の男を見たとき、あの灰色の男が立っていた。男は自分と一緒に

にいるあいだは、影を貸してやる条件で旅を共にした。自分の影でありながら借りうけたものであったが、影と一緒に旅できることは愉快的気分であった。影さえ取り戻せたらどんなに楽しい人生になるだろうかと巡らしてしまうのである。

I now continued my journey on the same road ; every convenience and even luxury of life was mine ; I moved about in peace and freedom, for I possessed a shadow, though a borrowed one ; and all the respect due to wealth was paid to me.

灰色のおしゃべりは常に毒を持っている。癖々したペーター・シュレミールは別れを告げる。灰色の男は再び死後のペーター・シュレミールの魂をしつこく要求する。この要求に応じれば、影を返し、当たり前前の生活と富を保証しようと言う。ペーター・シュレミールはトーマス・ヨーンのような豪華な生活を楽しむことが出来るようになるというのである。トーマス・ヨーンの安否を尋ねたペーター・シュレミールに男はポケットからトーマス・ヨーンの血の気のない醜い姿をつかみだす。トーマス・ヨーンは結局非業の死をとげ、魂は灰色の男の手中に落ちることになったのであろう。トーマス・ヨーンの姿を見たペーター・シュレミールは、灰色の男が申し出た魂と影の交換をきっぱりはねつけた。

Recollections of former days came over me ; and I hastily asked him if he had obtained Mr. Thomas John's signature. He smiled and said, "It was by no means necessary from so excellent a friend." "Where is he? for God's sake tell me : I insist upon knowing." With some hesitation, he put his hand into his pocket ; and drew out the altered and pallid form of Mr. John by the hair of his head, whose livid lips uttered the awful words, "I am judged and condemned by the just judgment of God." I was horror-stuck ; and instantly throwing the jingling purse into the abyss, I exclaimed, "Wretch! In the name of Heaven, I conjure you to be gone! —away from my sight! —never appear before me again!" With a dark expression on his countenance, he arose, and immediately vanished behind the huge rocks which surrounded the place.

それでもなお、魂などはこの世では生きるのに何の役にも立たない代物だと説得に努め、現世の享楽をすすめる。しかし、富や財産を断念したペーター・シュレミールは、とっさに、金を生み出す不思議な袋を奈落へ投げ捨てる。これはまた、影を断念する行為でもあった。ペーター・シュレミールは影のないことも一つの自分の運命として受入れたのである。そのときペーター・シュレミールの自らのうちに勇気が湧き上がってくるのを感じた。

もはや影もなければ金もありません。しかし、なにか胸のつかえがとれたようで気が晴れました。(p 304 l. 1)

私は一步步けば7里を行くという魔法の靴を履いていたのです。(p 308 l. 13)

深い黙示に打たれたかのようにひざまずき、感謝の涙にくれました。というのは突然、未来が開けたのです。かつての罪業により人間社会から締め出しを食らった代わりに、私

の大好きな自然がわがものとなったのです。大地が豊かな庭として、研究が人生の指針として、学問が至りつくべき目的として、この私に授けられたのです。(p 310 l. 1-5)

彼は感謝の涙にくれている。たしかに、影を完全に失うことによって永遠に人間社会から締め出されることになったが、彼の前には未来が開け、自然もまた、彼に門を開いたのであった。

この作品では、灰色の男との契約というモチーフが主軸となり、影の喪失が人間にとって、社会生活にとって何を意味するのかを語るのである。冒頭部分、ペーター・シュレミールが富豪トーマス・ヨン氏の邸宅を訪れたとき、金一番という資本主義的な考えに同意したシュレミールであった。その考えが支配すると思った作品が急転直下、『影』という形のない捉えどころのないモノの喪失で社会生活のできない恐怖の世界に入ってしまうのである。影を買い、しかもそれを切り取り巻きとってしまうということも驚きであるが、灰色の男が後半再登場し、影を返してほしければ魂と交換しようと言う条件を突きつける。ペーター・シュレミールは、ここにきてはじめて影=魂だということを悟る。人間の浅はかさ、目の前のことにこだわる人間の姿を描きだしていると思える。影の正体を暴くヒントが灰色の男のポケットの中にあることを知り、改めて厳然とした思いにさせられるのである。影の喪失の恐怖が、影を失う原初的な恐怖の感情として表現され、その恐怖をとおして、現代私たちの魂の喪失への危機に投げかけられていることに、最後に気付くことができるのである。

ただ単に影を盗む悪魔というホラーとしてこの作品を書いたのではなく、心理的恐怖や圧迫感、孤独を描こうとしている。語り口が終始、主人公ペーター・シュレミールから作者シャミッソーにあてた書簡、一人称であり、何度か名指してシャミッソーに語る部分もある。作中の登場人物が別の人物に自身の体験談を一人称で語る、枠物語の方法はよく見られるが、現実世界のしかもある特定の人に語るという形式は当時としては珍しい手法である。読者は、心の中の葛藤や苦悩に共感を覚え引き込まれていく。いとも簡単に拠り所を失ったペーター・シュレミールの孤独と恐怖である。その拠り所とは、『影』なのだ。その大切なものではあるが、自分の意志で、『影』との交換も断念する行為であるお金を生み出す袋を投げ捨て、灰色の男と決別する。寓話的と思える出来事の描写にあたってその語り口は実に大人に感動を与えるものであり、影が肉体的なものであり、精神的なものであることを実感できる作品といえる。『影』のないことを受容することによって、新たな世界が開け、そこに救いを求めることの出来るペーター・シュレミールの精神的な強さをも感じる作品である。形式的には童話にちかく、内容は幻想小説、心理小説に近いジャンルである。その意味では、とりわけこの作品は子ども向きというよりはむしろおとな向きの作品といえるのではないだろうか。この影の喪失は冒頭にも書いたシャミッソー自身が、フランスの祖国を失ったことを『影』として表現したのではないかという解釈もできるのである。何よりも大切なアイデンティティの拠り所の国を出ることの悲しみ、喪失感である。

3. ハンス・クリスチャン・アンデルセン (H. C. Andersens) 著『影法師』 (“The Shadow” 1847)

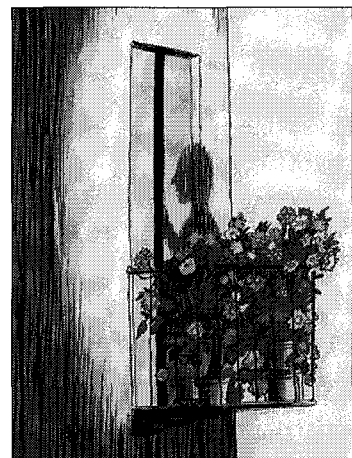
『影法師』はアンデルセンの作品中でもきわめて異色な恐ろしい作品で、傑作のひとつに数えられている。影そのものが主人公になる物語や小説は前出の『ペーター・シュレミールの不思議な物語』を含めて考えると思いのほか少ない。『影法師』は1847年に出された『新童話集』第二巻に収められたもので、アンデルセンが前年イタリアのナポリに滞在したときの体験が話の下敷きになっている。アンデルセンは、『影法師』を創作するとき『ペーター・シュレミールの不思議な物語』の存在を意識し、読んでいたものと思われる。シャミッソー自身が世界一周旅行の途中デンマークに寄ったことで、デンマークにも紹介され、アンデルセンがベルリンを訪れた際、シャミッソーを訪ねている。このシャミッソーの『ペーター・シュレミールの不思議な物語』(『影を失った男』岩波書店)は『影』を奪い去られてしまい、取り返すチャンスはあったのに放棄してしまった。それでは『影法師』は、どのような物語なのかをみていこう。

物語は、一人の学者 (A learned man) が寒い国から南の暑い国にやってきたことから始まる。その国の予想外の暑さに学者は日中はとても外にでることができず、家の中に閉じこもってばかりいた。夜になって町が活気づき人びとがバルコニーに出るようになっても学者の宿の向いの家だけはひっそりとして人影が見えない。バルコニーに花もあり中からなや神秘的な音楽もきこえてくる。



ある晩、学者はバルコニーから光が届くように感じ出してみると花が美しい色で炎のように輝いているのである。若い人が立って輝いているようにみえた。しかし、学者はそれを確かめる勇気もない。ある晩のこと、学者は自分の影が向いの家のバルコニーに映っているのを見て、冗談半分に自分の影法師に向って向い側の部屋に入って様子を見ては、などと言っていると、本当に影法師が家の中に入った。

“I think my shadow is the only living thing to be seen opposite,” said the learned man ; “see how pleasantly it sits among the flowers. The door is only ajar ; the shadow ought to be clever enough to step in and look about him, and then to come back and tell me what he has seen. You could make yourself useful in this way,” said he, jok-



ingly ; “be so good as to step in now, will you? and then he nodded to the shadow, and the shadow nodded in return. “Now go, but don’t stay away altogether.” Then the foreigner stood up, and the shadow on the opposite balcony stood up also ; the foreigner turned round, the shadow turned ; and if any one had observed, they might have seen it go straight into the half-opened door of the opposite balcony, as the learned man re-entered his own room and let the curtain fall. The next morning he went out to take his coffee and read the newspapers.

翌日、学者が日なたにでると自分の影がなくなっているのに気がつく。影法師は出掛けたまま帰らなかったのである。

“How is this?” he exclaimed, as he stood in the sunshine, “I have lost my shadow. So it really did go away yesterday evening, and it has not returned. This is very annoying.”

学者は腹を立てたが、影法師がいなくなったからというよりは、影をなくした男の話があるのを知っていたから。その話はふるさと寒い国の人々はみんな知っていたので、国に帰って自分のことを話したらそれはみんなは人まねをしたまでだというので、その話をしようとは思わなかった。

And it certainly did vex him, not so much because the shadow was gone, but because he knew there was a story of a man without a shadow. All the people at home, in his country, knew this story ; and when he returned, and related his own adventures, they would say it was only an imitation ; and he had no desire for such things to be said of him. So he decided not to speak of it at all, which was a very sensible determination. (アンダーラインは筆者による)

それでも暑い国は何でも早く成長するらしく、一週間で新しい影が生え始め、故郷に帰る頃には立派な一人前の影法師に成長していた。学者は故郷にかえり、真善美について何冊もの本を書いた。その後しばらくたったある夜、昔の影法師が以前は主人であった学者を訪ねて来る。影法師はとびきり上等の服にエナメル靴、金の首飾りにダイヤモンドの指輪が光っている姿で現れ、今までの経験を語るのです。向かいの家には「詩」が住んでいてそこに3週間留まり、それは人が3千年生きていて詩にうたわれたり、本に書かれたりしたものを讀んだのと同じ効果があった。影法師は『詩』と親戚関係になり、人間になったという。しかし、影法師はその性質を利用して夜に行動し、人間生活について誰もが知ってはならないことを、そのくせ誰もが知りたがっていること「隣人の悪」を見、それを種に金を稼いできたというのである。それから何年か経ち、影法師はまた、学者を訪ねてくる。

“That is a matter of opinion,” replied the shadow. “At all events, a journey will do you good, and if you will be my shadow, then all your journey shall be paid.”

学者は研究がさっぱり世間の注目を浴びず重病になってしまう。『先生は影法師のようにみ

えますよ』と世間の人が言うようになってしまう。影法師は、学者に自分が費用を持つから湯治に行こうと提案し、そのとき自分が主人となり、学者が影法師になるという条件を無理やり押し付けてしまう。もともと優しく、穏やかな学者は馬鹿げているなと思いつつながら影法師の言いなりになり、影法師は学者に「君」(you) というが、学者は影法師に「あなた」(thou) と言わなければならない関係にまで落ち込んでしまう。

And at last they started together. The shadow was master now, and the master became the shadow. They drove together, and rode and walked in company with each other, side by side, or one in front and the other behind, according to the position of the sun. The shadow always knew when to take the place of honor, but the learned man took no notice of it, for he had a good heart, and was exceedingly mild and friendly.

温泉場に来た二人はそこである国の王女に出会う。王女は影法師と結婚するにあたって影法師がどれほど学問があるかをためそうとしたとき、影法師は私の影法師だって答えられますよと学者に答えさせる。

王女は感心し、結婚を決定する。真実が明かされるのを恐れた影法師は学者を牢屋に押し込め、王女と影法師は無事に結婚する。夜になると祝砲がなり、町はイルミネーションに輝き結婚式がおこなわれたが、『学者はこの賑わいを何もききませんでした。なぜなら、もうとうに命を奪われてしまっていたからです』と言うのがこの話の結末である。

この作品は実に不思議で、例えばこの作品を小説に見立てると、一見学者の自己形成の過程を描いた *building roman* ではないかと錯覚させる。しかし、影法師が学者から独立して学者から影が失われるや否や、物語において学者の影は文字通り薄くなっていき、最後には学者の存在そのものが闇に葬り去られる。だからといって、影法師を独立した存在として、学者抜きに扱えるかということそれも無理である。影法師は外見上どんなに一人前の人間に姿形を似せていようと、実体、言い換えれば肉体がないのである。物語の終盤で、ある王国の姫と出会い、ダンスを踊る場面では次のように描かれている。

夜には王女と影法師は大きな舞踏ホールでダンスをしました。王女は身が軽かったのですが、影法師はそれよりさらに軽かったのです。こんな身の軽い人と彼女は一度も踊ったことはありませんでした。

In the evening, the princess and the shadow danced together in the large assembly rooms. She was light, but he was lighter still; she had never seen such a dancer before. She told him from what country she had come, and found he knew it and had been there, but not while she was at home. He had looked into the windows of her father's palace, both the upper and the lower windows. . . .

これも想像を絶する話ではあるが、学者には新しい影ができ、影法師には当然のことながら実体のある肉体がない。だから、結局は学者を自分の実体(肉体)として学者を影として寄り

添わせておかなければ人前に出ることが出来ない。つまり学者と影法師は互いに持ちつ持たれつの関係にある。人間の影に対する主と従の考え方からいけば、主がなければ従がないにもかかわらず、従をないがしろにした浅はかさ、影についての無意識さを認識させている作品といえる。影法師の最初の目的は人を悪に誘うのではなく、自由の身になることであった。では、なぜ影が悪に染まるようになったのであろうか。このあたりに学者の目指す思想の対比が見られる。あらすじで述べた“詩”の特性に触れたからである。影法師が学者に語る場面を振り返ってみよう。

それはあらゆるモノのかなで最もうつくしいもの、ポエジー (poetry) さんだったんですよ。私はそこに3週間いましたが、それは3千年生きて、今までに作られ、書かれた詩を全部読んだのと同じくらいに実りある日々でした。[中略] 私はすべてを見、何でも知っています。[中略] そこには何でもありました。私はちゃんと中へ入ったわけではなく、薄闇の控えの間に立っていました。けれどもそこは場所が特別よく、何もかも見ることができたのです。すべてのことがわかったのです。そこは控えの間でポエジーさんの宮廷にいたわけです。あなたがあそこへ行っても人間になることはなかったでしょうが、私はなったのです。[中略] 月明かりの中私は通りを走り回りました。私は他の人たちがのぞけないところをのぞき、ほかの誰も見えてはいけないうちを見ました。私は人間なんかになりたくなくなりました。人間であると言うことには何か意味がある。そう思っていたんですが、それが少しも認められなかったんですからね。私は全く信じられないようなことどもをみたのです。[中略] みんなは私をすごくこわがりました。

この影法師の告白は、詩とは学者が想像するような神聖な場所＝教会、古代の栄光＝古代の神々、美しさのシンボル＝若い娘、善なるもの＝子供など光輝くイメージで構成されているのではなく、偽善的で邪悪なものなど暗澹としたイメージを宿しており、その中にこそ本性が極められているというのである。これほどまでに影法師を悪として描きながら、さらりと学者の信じてやまないロマン主義、審美主義的な生き方に鋭い批判を加えている点での作品はめずらしい気もする。しかも、きっと栄光を獲得した影法師が、学者の影法師であった頃には、同じ生き方をしていたらろう生き方を冷ややかに批判し、さらに人間にはなりたくなかったといわせている。しかし残念なことに人間になった今、若い王女と結婚するために自分自身の源である学者を犠牲にしてしまったのである。人間の心に住む表裏、また影法師は無意識のうちにそれぞれの心の中に宿り、意識を破滅させる力をもっているものであることをアンデルセンは読者に知らせているのだろうか。人間にあこがれていた学者の影が学者の最も大切にしている詩の真髄を知り、学者そのものである人間を否定するアンデルセンが書いた童話とは趣を異にした哲学的な作品といえる。『影法師』が自分の「主人」と一緒にいれば(当然のこと)同一の人間の2つの面をもち、影法師が一個の独立した存在になれば、同一の人間の中で分裂が起こったことを意味するのではなかろうか。影法師は外面も内面も学者とは一見正反対である。影法師は自信に満ち溢れ、自己顕示欲が強い。お金があれば思うがままと心得、誇らしげに人

目にちらつかせている。外見の描写では、次のようなところがある。

・・・時計にぶら下がっている高価な印形の束をガチャガチャいわせ、クビにつるしていた太い金くさりの中に手をいれました。いやはや、どの指も何とダイヤモンドの指輪にかがやっていたことでしょう。

影法師が人間になりきっているのは驚くばかりでした。黒ずくめの服装で、それもごく上等の布地でした。エナメル靴をはき、たたんで小さくし、てっぺんとふちだけにすることの出来る防止をかぶっていました。ホントに影法師はなみはずれていい身なりをしていました。

影法師と学者の違い、机上に力を注ぐ理論派と足を運ぶ実践派であろう。

私は外に出掛け、つきの光を浴びながら町をあるきまわりました。壁をかけあがったり、降りたりして、1番高い窓を覗き込んだり、他の誰にも見えないもの、誰も見てはいけないものをみました。

影法師は自分の目で現実をその細部までみ、自分の目で確かめた。これは、学者が常に頭で考え、影法師が離れて向いの家の中を見てくると命令を受けたことへの恨みやしっぺ返しであろう。人間の影は常にその人の生き方に縛りつけられ、抑圧され、当然のことであるがその人の生きかたのみを主としていきるのである。しかし、いったん離れて出た影法師は分裂し、違った生きかたができるのである。ある影法師は、学者の模倣をし、ある影法師は無意識のうちに反発し全く違った生きかたをするであろう。アンデルセンの『影法師』は、この後者を選び、学者自身をも疎ましい存在として消し去ったのである。

I 影についての部分でも述べたごとく、このような点から、影を身体と心、意識と無意識、良心と悪心と関連付けることができる。

学者が自分の影を失ったとき、影を失った男の話が故郷の人々は知っている、『ペーター・シュレミールの不思議な物語』について触れている。

And it certainly did vex him, not so much because the shadow was gone, but because he knew there was a story of a man without a shadow. All the people at home, in his country, knew this story; and when he returned, and related his own adventures, they would say it was only an imitation; and he had no desire for such things to be said of him.

アンデルセンはこのシャミツソーの作品を意識していたのである。アンデルセンの『影法師』はこのアーデルベルト・フォン・シャミツソー著『ペーター・シュレミールの不思議な物語』をすでに読んで書かれたと思われるが、魂の喪失が人間として生きるときにどれほど悲しいものであるのかを、知らせている点では、二作品は共通点があり、人格の分裂や喪失への警告をしているのである。社会の機械革命、技術革命などによるコンピューター万能時代において、人間が阻害されていくことへの警告にもなっている。

Ⅲ おわりに

『影』そのものが出てくる3つの作品をみてきた。これらの作品より図らずも自分につきまとう影について再認識させられた。影はフレーザーの研究の古代思想やアミニズムにとどまらず、市民生活を正常に行うための市民権をえているのである。たかが影、されど影である。影があれば尊敬に値する人物であることを経験するのは、灰色の男から借りた自分の影と共に旅をしたペーター・シュレミール自身である。3作品とも影は自分の人格であり、命であり、魂であることを暗示し、思い知らされる。人が亡くなったとき、鏡に覆いをかけたり、後ろ向きにするというあまねく行われている行為もこれらの作品を通して説明することができるのである。鏡に映った映像の形で人物から離脱した精神、靈魂が死者の霊によって連れ去られるかも知れないと心配するからである。シャミッソーやアンデルセン、バリーが古代思想を意識下においていたのか、友人に語ったといわれている自らの体験からの発想であるのか明らかではないが、影を通して『ペーター・シュレミールの不思議な物語』では、資本主義社会の「お金」に埋没していく主人公の姿を批判し、「お金」から開放される時、始めて「魂」の開放があることを示唆している。暗い（影）の世界から明るい世界へと導くのである。この魂の開放こそが児童文学の目的とするところなのである。シャミッソーは、明るい世界へ導く道具として、シャルル・ペローの昔話の『おやゆび小僧』（後にグリム兄弟によって『ヘンゼルとグレーテル』として語られる）に出てくる七里靴を与えているのである。アンデルセンの『影法師』では、ロマン主義・審美主義の「詩」第一主義に鋭い批判を加えている。影は本物と類似しているが、本物ではなく、常にそのものと共にあるという意味から影を分身とみる見方もある。分身であるが全く同一ではない。影が正反対の性格や服装をすることから、重複存在とされる二重身の現象も発想できる。今回は、二重身の作品には触れることができなかったが、私たちが重点をおかず、光に隠されたような影、その影を主題にした作品が、detective story さながらの迫力で、私たちの心に語りかけている作品といえる。

引用・参考文献

- J. G. フレーザー 永橋卓介訳『金枝篇』（二） 1951 岩波文庫
 フケー／シャミッソー 池内紀訳『ドイツ・ロマン派全集第5集』 1983 国書刊行会
 シャミッソー 池内紀訳『影をなくした男』 1985 岩波書店
 大畑末吉訳『完訳アンデルセン童話集』（3） 1984 岩波文庫
 高橋健二訳『完訳アンデルセン童話集』（3） 1986 小学館
 アンデルセン 長島要一訳『影』 2004 評論社
 J. M. バリー 石井桃子訳『ペーター・パンとウェンディ』 2003 福音館文庫
 ジェームズ・バリー 本多顕彰訳『ペーター・パン』 1953 新潮文庫
 河合隼雄『昔話の深層』 1994 講談社+α文庫
 J. M. Barrie “Peter Pan and Wendy” 1985 Award Publications
 J. M. Barrie “Peter Pan and Wendy” 2003 Pavilion Books
 Hans Christian Andersen “The Complete Stories” 2005 British Library Publishing Immensee, Peter Schlemihl, Brigitta “Famous German Novellas of the 19th Century” 2003 Mondial